

二〇二四年度
晃華学園中学校

第二回
入学試験問題

【国語】

時間…四〇分
配点…八〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「唯人^{ゆいと}」は母と二人暮らしである。「唯人」のクラスに転校してきた「アズ」はクラスにとけこもうとせず、老人福祉施設^{ふくししせつ}「あすなる園」を訪問した帰りのバスの中で、クラスメイトにからかわれてしまう。その時「唯人」は「アズ」をかばうが、「アズ」はその後学校を休み続けた。冬休みに二人は町で偶然^{ぐうぜん}会い、「唯人」は「アズ」に誘^{まて}われて動物園に行くことになる。

天王寺動物園^{てんのうじ}のゲートをくぐる。冬の動物園に来る人は少なかった。

「ここに来たことあるでしょ」

「うん」

「だと来たの？」

アズに聞かれて、ちよつと考えた。

「覚^よえてるんは幼稚園^{ようちえん}の遠足^{えんそく}やな」

「それから？」

「そんだけや」

「家族^{かぞ}でいっしょに来たりしなかったの？ 肩車^{かたぐるま}とかベビーカーとか、楽しそうな家族連れがよく来てるでしょ」

「うちはそんなことせえへんかったな」

「ふうん」

① アズにうそをついたわけではない。

父さんと母さんと唯人。三人で動物園でとった写真がある。あれが楽しそうな家族連れだとは思いたくなかった。その年、春を待つことなく、父さんは唯人たちの前からいなくなってしまったのだ。だから唯人の記憶^{きおく}の中に父親のことなんかひとかけらもない。

歩いていくうち、唯人はあつと気がついた。

ここであの写真をとったんやな。

売店はいくつかあったけれど、シマウマのベンチが残っていたからまちがいない。いつだったか母さんが話していたのを思い出して、

心の中でそつとなぞってみる。

——めずらしく雪が積もった日でな、竜次さん、ダウンジャケット着てはるやろ。それをぬいでうちの背中にかけてくれたんや。唯人ごとすっぽり包まれてな、ほんま幸せやった。冬の動物園もええもんやったで。

けど、何も覚えてへん。そんなんは来たうちに入らへん。

唯人は自分でそう決めつけていた。

——ここにおる動物は、ほとんどが南の国から連れて来られたんや。寒そうや。かわいそうや言うて、いちいち立ち止まってぼやいとつたな。

その話は何度か聞いたけど、ちつとも楽しそうやない。なら、動物園なんか来なければいいのと思った。

「あたしは、ひとりで来るんだ」

「そうなんや」

「だれもいないときね、彼と目線が合うことがあるの。それってほとんどキセキよね。彼はあたしのこと待っててくれる気がするの」

「彼ってだれや?」

唯人が聞いても、アズはこたえない。

1 が急ぐのか、早足でどンドン歩く。歩きながら思いついたまま話し始める。

「ねえ、金沢の雪はすつごく温かいんだよ」

「うそやろ」

雪国やんか。もつと寒いんちゃうの?」

「本当だよ。ぼたん雪なんだもの。手のひらでつかまえられるよ。けど、大阪の雪はどうして冷たいんだろ。細かくて、目にささるよ
うな痛そうな雪しか降らないの」

ああ、聞いたことあるわ。気温が低いと粉雪になるんやな。大阪のほうが寒いんか。

そのとき、白いものがまい始めた。見上げると、暗い空から落ちてくるのは、アズの言う痛そうな雪にちがいがなかった。

「わあ、やっぱり降ってきた!」

いきなりアズは走り出した。

おい、どこ行くんや。ちょ、ちょい待てよ、アズ。

唯人もあわてて追いかけた。がらんとした通路。全力で走っても、だれにもぶつかることはない。ポケットに入れていた手を出してガチで走った。

うわっ、足、速いな！ こんなところで鬼おたごっこしてどないするんや。

「おい、アズ、アズ」

呼んでみたけど、止まらない。冷たい風が当たって、耳がピリッと痛くなる。

数メートルほど先で、アズはようやく立ち止まった。

「来たよ！」

静かな動物園にアズの声がひびいた。

何を見てるんや？

2 をはずませて、唯人はアズのとりにならんだ。

アズが見ていたのは一頭のオスのライオンだった。ライオンはねむりこけていた。横向きにねそべったお腹なかが、スースーと大きく上がり下がりしている。

ああ、夜行性やからな。昼間はねとるんや。

冷たい指先をこすりながら、しばらく見ていると、ライオンが A 体を起こした。はく息が、B、白いけむりのように空に上っていく。

雪の日のライオン。

それは、一枚の絵のように静かだった。

C すわった一頭のライオン。りっぱなたてがみだけが王様だった過去の名残なごりのようだ。それだって、どこか作り物のようにならなく見える。ライオンは居心地いこちが悪そうな顔をしていた。場ちがいなところに来ちまった。雪なんか降ってどうするんだと途方とほうにくれている。唯人にはそんなふうに見えた。

「またやっちゃった」

アズが口を開いた。

「バクハツか？」

「うん」

「アホやなあ」

ぱっと、アズが唯人の顔を見た。

あつ、しまった。ついアホなんて言うてしもた。バクハツもや。また言葉がきついなんて言われそうや。

「そうだよ。② あたし、バクハツするの自分ではどうしようもないんだ」

へっ、おこらへんのか。ひょうしぬげや。というか、アズはみんながバクハツと言うてるのを知ってたんやな。

「今度はなんや？」

「ママとけんか、かな。あたし学校休んだから、いろいろ言われちゃって……。一週間も部屋に閉じこもってたんだよ」
「なんや、金沢に帰ってたんとかやうんか。」

「あのね、あたしね、ママと二人でこの町に来たんだ。ママったらね、突然、とつぜん パパと離婚りこんしたいのに理由が見つからないって言い出すんだよ。それでたんしんふにん単身赴任することになって、あたしはそのおまけ。パパと金沢に残りたかったのに、ダメだって。ママには逆らえなくてふり回されてばかりなの」

アズはくやしそうに、スニーカーのつま先でライオンのサクをつんとつけた。

しんどい話やな。アズはだれに向かっておこつたらええのかわからへんや。そやから、③ あっちでこつん、こつちでこつん。ぶつかってばかりなんや。

「ママはかわいいそうなの。だってね、生きてきたすべてをやり直したいなんて、あたしに言うんだもの」

「ああ、だれかも同じようなこと言うてたわ」

「えっ？」

「おれのおっちゃん」

「そっかあ。大人ってみんなそうなのかしら」

さあ、わからへんな。おれらまだ、やり直すほど生きてへんからな。

アズは唯人のほうに向き直った。

「おかしいの。あたし、唯人くんにアホって言われてもちっともいやじゃないよ」

「あつ、すまん」

悪気はないのに、つい言うてまうわ。

「いいよ、おこつてないよ。あのね。ちゃんとお礼言つてなかった。この間、バスの中でかばってくれてありがとう」

「うん」

「すつごくうれしかった」

「ほんまか。なら、おれもよかったわ」

「なのにあたし、学校に行けなくなつちやつて、なんかはずかしい」

④ 風がふいて、足元にうつつすらとたまつていた雪が、さらさらと飛ばされていく。粉雪は積もらない。どこにもとどまることなく、かわいた風に運ばれて動物園の空を通り過ぎていった。

「大阪の町つて、ごちゃごちゃして落ち着かない。あたしは八つ当たりばかりしてるから、友達もいないし。だけどイラついてどうしようもなくて、町も学校も、ちつとも好きになれなくて。なんか、あたしだけひとりぼっちで外国にいるみたい」

アズってこんなふうに話すんやな。学校とは大ちがいや。「あすなる園」のときも思ったけど、こつちのアズのほうがええな。バリアをはってない素のまんまのアズ。

もうすぐ三学期やし、なんとかならんのかな。

「なあ、まちがつとつたらごめんやけど、ほんまはみんなと仲ようしたいんとちゃうか？」

「えつ、うん。仲よくとまでは思つてないけど……」

アズは少しの間、ライオンに目を向けた。

「こんなじゃダメ……、だよな？」

「そうやな。どないしたらええんやろ」

「わかんないよ」

「おれもわからんけど」

「考えてくれる？」

「おう」

アズとおると、おれは言葉がすらすら出てくる。不思議や。

「どうしてこんなこと話したくなるんだろ。笑わないで聞いてくれる？」

「ええよ。言うてみ」

「大阪に来たばかりのころ、あたしは町をさまよって、ふらりとここに着いたの。じっと見てたらライオンが起き上がってね、目が合ったんだよ。それだけじゃなくて、声も聞こえたの。帰る場所がないのはおまえだけじゃないぞって。本当だよ。本当に声が聞こえてきたの」

「うん」

「なあんだ、そうかって。あたしだけじゃなかったんだって。すつごく安心したの。だから彼はあたしの親友になったんだ」

「親友ってライオンのことやったんか」

「そうだよ。信じてくれる？」

「信じる」

唯人ははっきりと言った。

「ありがとう」

自分だけ外国におるとか、帰る場所があらへんとか、アズはそんなふうにおもったんやな。おれの父さんかて、この町に来てアズと同じような気持ちやったのかもしれない。

ふいに、ライオンは立ち上がった。

一歩ずつ近づいて来る。こわくなかった。それどころか、なんておだやかな、なんて温かい目を向けてくるんやろう。ほんまにアズのこと、見てみたいや。

彼は首を少しかたむけて、今にも何か言いたしそうな顔をしていた。

「ん？ 何？」

アズが身を乗り出したそのとき、ライオンは、小さく一つ、クシャミをした。

フ、フォン。

たてがみが、ばさつとゆれた。

「おれかて、ひとりぼっちやで」

唯人がつぶやくと、アズはびくつと小さくふるえた。

唯人を見る目になみだがもり上がっていく。

なんちゆう顔するんや。……アホやな。

アズはあわててコートのをのばすと、目元をおさえた。

唯人の口からふつとこぼれた言葉が、アズの胸の深いところにすんとどいたようだ。アズは何度もうなずいていた。⑤ 唯人のひとりぼっちと、アズのひとりぼっちが同じかどうかはわからない。でも、今、確かにそれは重なった。

「似合わないよね。雪の日のライオン」

「ほんま似合わへんな」

あとからあとから落ちてくる白い雪。それは、唯人もアズもライオンも、やさしくあわく包みこんで降り続いた。

(志津栄子『雪の日にライオンを見に行く』)

問一 —— 線部①「アズにくわけではない」とありますが、この時の「唯人」はどのような気持ちですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 動物園でとった家族写真はあるが、その後すぐにいなくなってしまった父のことを見捨てたので、父を家族とは思っていない

イ 動物園でとった家族写真はあるが、父は「唯人」にほやいてばかりいて嫌な思いをしたので、楽しい思い出とは思えない

ウ 動物園でとった家族写真はあるが、「アズ」が急いでいたので、いなくなった父のことをくわしく話す余裕がないと思った

エ 動物園でとった家族写真はあるが、その後父がいなくなったため父の記憶は何もなく、楽しい家族連れだったとは思えない

問二 1、2 に当てはまる言葉は何ですか。次のア～オの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 心 イ 息 ウ 事 エ 足 オ 気

問三 A、C に当てはまる言葉は何ですか。次のア～オの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ただし、同じ記号は一度しか選べません。

ア のっそりと イ 堂々と ウ ぼつんと エ じつくりと オ ゆつくりと

問四 — 線部②「あたしくないんだ」とありますが、「アズ」が「バクハツする」のは、どのような気持ちの時ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 他人の目が気になり、悲しい気持ちになっている時

イ 母親の気持ちに同情できないどころか、腹立たしく思っている時

ウ まわりに対するいらだちを感じ、それを持って余している時

エ 父親に怒られて、くやしい気持ちになっている時

問五 — 線部③「あつちでくこつん」とありますが、これは具体的にどのようなことですか。次のア～オの中から当てはまるものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 母親とけんかして部屋に閉じこもること

イ 母親に逆らえず大阪に連れてこられたこと

ウ 町をあてもなくあちこちとさまようこと

エ 八つ当たりをしてまわりの人と衝突すること

オ ライオンに会うために突然走り出すこと

問六 — 線部④「風がく通り過ぎていった」に関する説明として、最も適当と考えられるものはどれですか。次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「どこにもとどまることなく」は、よるべのない二人の不安な気持ちを表している

イ 「さらさら」とは、二人がそれぞれかかえている悩みのはかなさを強調している

ウ 「かわいた風」は、お互いの問題に関わらないようにしている二人の様子を強調している

エ 「動物園の空を通り過ぎて」は、動物園から家に早く帰りたい「唯人」の気持ちを表している

問七 — 線部⑤「唯人のく重なった」とありますが、これはどのようなことですか。五十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。本文中の「写真54・56・57」は省略します。また、※1～※3の言葉は、後に注付けてあります。

現在、あちこちでSDGs（持続可能な開発目標）やバリアフリーの理念が高らかに謳われている。特に前者は多くの自治体や企業で取り組むべきものになった。適当に都市名、もしくは企業名を入れて、「SDGs」の言葉とあわせて検索すれば、いくらでも事例を挙げられるだろう。またダイバーシティ（多様性）やインクルーシブ（包摂的）などのキーワードも流行している。国連サミットで採択されたSDGsの説明を読むと、一七の開発目標として以下のようなものを掲げていた。例えば、「目標1 あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」、「目標8 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する」、「目標10 各国内及び各国間の不平等を是正する」、「目標11 包摂的で安全かつ強靱で持続可能な

① 商業化されたSDGsだ。「我々は貧困を終わらせることに成功する最初の世代になり得る」という宣言に向かうどころか、コロナ禍において格差はさらに増大し、排除ベンチや排除アートは貧困から目をそむけることに貢献している。そしてバリアフルな社会をめざしているかのようだ。

ホームレスが使いにくいベンチは、実は一般人にとつても座りにくい。大阪で派遣切れとなつて野宿生活をする男性の言葉として、次の言葉が紹介されていた（田中洋史「横になれないベンチ」『読売新聞』二〇〇九年二月二〇日）。「社会どころか、公園のベンチにまで拒絶されているみたいだ」。これを書いた記者は、ひじかけタイプの仕切りがあるベンチに腰掛けると、少し窮屈に感じ、くつろげないことを確認している。そして、こう記した。「時には横になって本を広げたい。肩を寄せ合つて座りたい親子、恋人たちだっているだろう。誰でもゆつたりとくつろげてこそ、公園のベンチだと思う。」^② 様変わりするベンチの姿にギスギスした今の社会をかいま見るようで、寂しくてならない。ベンチやアートだけではない。二〇〇五年の愛知万博の直前、おそらく外国人に見せないために、白川公園のダンボールハウスが強制的に排除された後、同じ場所に花が植えられ、緑を大切にという看板が掲げられたが、人に対しては厳しい処置だった（写真54）。しかし、以前の風景を知らなければ、公園で起きたことはもうわからないだろう。

排除アートは、われわれが使えるはずだった場所を奪う。本来、広場や公園などの公共空間は、有料で入場するテーマパークと違い、未定義の部分があり、様々な可能性に開かれている。それをあらかじめつぶすのが、排除アートなのだ。建築家の青木淳は、^③「原つ

ばと遊園地」という二つの空間モデルを提示している（『原っぱと遊園地——建築にとってその場の質とは何か』王国社、二〇〇四年）。前者は『ドラえもん』の漫画に登場するような土管が転がった空き地、後者はいわゆるテーマパークのようなものをイメージしたらよいだろう。原っぱは、特定の目的がなく出現したもので、子どもたちはそこで自ら考えて、遊び方を工夫する。一方、「遊園地」は何から何まで至れり尽くせりで遊び方があらかじめデザインされており、^④余白がない。青木は建築のデザインにおいても前者のモデルを推奨し、すべての形態と機能が一对一の関係になっていない自由さを好む。本来、公共空間も、そのような場だろう。だが、排除ベンチや排除アートの導入されることによって、不測の事態が起きない「II」に変貌する。

ところで、文化人類学に詳しいデザイナーの阿部航太が制作した『街は誰のもの？』（二〇二一年）は、ブラジルの路上で活動する^{※1}グラフィティのアーティストを記録したドキュメント映像だった。興味深いのは、三種類の様態が存在すること。まずギャラが支払われ、A「プロジェクト」は、そもそも認可されたものだ。これはパブリックアートの事業に近いだろう。次に依頼なしに描かれ、B「グラフィッチ」は違法だが、街の人にはカラフルで良いとポジティブに黙認されている。そして街の人も消したいと思う落書きのよくなものを「ピシャソン」と呼ぶ。スケートボードと同様、描き手が都市を独自にとらえ、ビルの壁や高速道路の橋桁などを、彼らのキャンバスに変えていくが、もちろん^{※2}ヴァンダリズムと紙一重である。だが、興味深いのは、グレーゾーンにおいて描かれるグラフィティは、街を生き生きとさせ、経済に支配されず、「街を自分たちの手でつくっていく感覚」と歩調をあわせ、独自の公共性をつくりだしていることだ（阿部航太監督インタビュー「個として存在できる街とは？」二〇二二年二月九日／<https://antenna-mag.com/post-57661/>）。ブラジルでは「III」としての街を肯定している。

他者を排除していくと、誰にもやさしくない都市になる。われわれはすでに気づかないうちに、そうした環境に順応させられているかもしれない。ア 筆者はこんな体験をしたことがある。雨の日だったので、東京駅から大手町の日本経済新聞社東京本社ビルまで、地下街を一〇分近く歩いてきたが、途中でベンチがひとつもないことに気がついた。イ もちろん、お金を払えば、座れる

カフェは存在した。が、無料で休める場所はない。排除ベンチは、拒否のデザインである。しかし、ベンチをなくせば、寝させないことにも気づかない。ウ つまり、何も置かないという選択肢である。が、おそらく高齢者や妊婦、体の調子が悪い人は、なぜこれだけ広い地下街を歩いても、ベンチがないのだろうと気づくはずだ。エ したがって、これはホームレスだけの問題ではない。実

はどんな健常者であろうとも、潜在的に排除される可能性にさらされる都市空間である。だが、本当にそうした環境でよいのだろうか。

個人的な話だが、リスボン建築トリエンナーレ2007において、筆者が日本セクシヨンの^{※3} キュレーションを担当し、設営の現場に立ち会ったとき、自腹でベンチを購入したことがある（写真56）。一九九八年のリスボン万博にも使われた広い会場を歩いてまわったところ、展示ばかりで、ほとんど座る場所がなかったからだ。そこでまだ日本のエリアは空間に余裕があったことから、ホームセンターで売っていた安物だが、白いベンチを置いた。会期が始まると、実際にそこで腰掛けて休む人が続出していたので、ささやかな空間への介入でも意義はあったと思う。

最後に岡本太郎の「坐ることを拒否する椅子」（一九六三年、写真57）をとりあげよう。彼は巨大な壁画や屋外彫刻のように、公共空間に設置され、誰も所有しないアートを望んだが、これは題名通り、座面が丸かったり、ハート型だったり、顔がついているなど、座りにくい陶製の椅子である。もちろん、これは他者の排除を狙ったわけではない。生ぬるく快適に生きると人間が飼いならされて、ダメになるから、山の中の切り株のような椅子をつくり、大衆社会に送り込んだものだ。いわば反語的なメッセージである。座るのではなく、それでも果敢に座ってみろ、と訴えるものだ。一方、彼は、弱者である病人や高齢者は座りやすい椅子を使うべきだと述べたという（https://www.1101.com/tanoshini/2017_aw/taro/2017-11-09.html）。岡本の時代に排除アートは存在しなかった。「坐ることを拒否する椅子」は、モダニズムの機能主義に対する批判でもある。一方で排除アートは「くさせない」という機能を担わされた造形だ。まずはわれわれが街に出かけ、他者の視点をもって、知らないうちに増えている排除アートを発見・体験し、都市の不寛容を知ることから、意識を変えていく必要がある。

（五十嵐太郎『誰のための排除アート？——不寛容と自己責任論』）

- ※1 グラフイティリスプレーなどを用いて、公共物に絵や文字を描くこと。
- ※2 ヴァンダリズムⅡわざと公共物に落書きをすること。
- ※3 キュレーションⅡ展示の企画や運営を行うこと。

問一 I に当てはまる言葉は何ですか。左に示した「SDGs目標11」のアイコンを参考にして、次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 企業
- イ 開発
- ウ 都市
- エ 環境



(「国連広報センター」HPより)

問二 — 線部①「商業化されたSDGsだ」とありますが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしていますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア SDGsの本来の目的とは異なり、利益を求める方向に利用されている

イ SDGsの成果を経済に応用することで、社会が豊かになっている

ウ SDGsの考え方は、現代の人々の暮らしぶりとは合っていない

エ SDGsの活動を行う場合は、商業施設しせつを使うと効果的である

問三 — 線部②「様変わりするベンチ」とありますが、どのようなベンチに変化していますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 廃材はいざいをリサイクルしたベンチ

イ 仕切りが付いているベンチ

ウ 横よこになれる幅はばのベンチ

エ 木のぬくもりを生かしたベンチ

問四 — 線部③「『原っぱ』と『空間モデル』とありますが、この二つのモデルの違いを踏まえたとき、Ⅱ、Ⅲには、

それぞれ「原っぱ」または「遊園地」のどちらの言葉が当てはまりますか。「原っぱ」・「遊園地」のどちらかを書いて答えなさい。

問五 — 線部④「余白がない」とありますが、これはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 遊ぶだけの心の余裕がない

イ 遊びに割きける時間がない

ウ 空き地に遊べるだけの広さがない

エ 他の遊び方が選べない

